

『万葉集』から見る日本の古典 ④

獨協大学特任教授 城崎 陽子

磐姫皇后



難波宮跡

『万葉集』は舒明天皇の即位(六二九)から天平宝字三年(六五九)の最終歌まで、およそ130年間の「万葉の時代」に詠まれた歌から成り立っていることは先にも記した。この時代に先立つ象徴的な歌人が、先回まで取り上げた雄略天皇であり、今回取り上げる磐姫皇后である。なお、「イワノヒメ」の表記は「磐之媛」(『日本書紀』)、「石之日売」(『古事記』)とさまざまであるが、引用する原文表記を除き、『万葉集』の表記で統一する。

磐姫皇后は、葛城(奈良県南西部)一帯の大豪族であった葛城襲津彦の娘で、仁徳天皇の皇后、後の履中天皇、反正天皇、允恭天皇の母である。磐姫の歌は、『万葉集』巻二の冒頭に掲げられている。

相聞
難波高津宮に天の下治めたまひし天皇の代(大鷦鷯天皇、謚を仁徳天皇といふ)

磐姫皇后、天皇思ひて作らず歌四首
君が行き
日長くなりぬ
山尋ね
迎へか行かむ
待ちにか待たむ

右の一首の歌は、山上憶良臣の類聚歌林に載せたり
(巻二・八五番歌)
かくばかり
恋ひつあらずは
高山の
岩根しまきて
死なましものを
(巻二・八六番歌)

君をば待たむ
うちなびく
我が黒髪に
霜の置くまでに
(巻二・八七番歌)

秋の田の
穂の上に霧らふ
朝霞
いつへの方に
我が恋止まむ
(巻二・八八番歌)

『万葉集』巻二は、「三

大部立」(『万葉集』の歌の主要な三つの分類項目)のうち「相聞」(主に恋の歌)と「挽歌」(人の死に関わる歌)を納める巻である。巻二が「雑歌」(宮廷儀礼や行幸、宴の歌)のみで構成されておらず、巻二とあわせて三大部立がそろっていることから、「二」巻をあわせて、『万葉集』の基本となる巻と考えられている。巻二の冒頭が磐姫皇后の歌であることには編者の意図がみえる。ちなみに、『万葉集』に仁徳天皇の歌は納められていない。

さて、四首の歌は、「題詞」(歌の前におかれ、作歌事情を示す)に仁徳天皇を思慕して詠った歌であることが示されている。一首目の「君が行き」は、「仁徳天皇の行幸を指し、天皇の不在が長くなったことから「お迎えに行こうかしら、待つていようかしら」と詠う。二首目の、「高山の岩根しまきて」とは、高い山の岩を枕にす

ることをいい、「こんなに恋しく思っているくらいなら、いつそ死んでしまおうかしら」と詠う。三首目は、「黒髪に霜」を文字通りととるか、喩えとして「黒髪が白髪になるまで」ととるかで解釈がわかれるが、「いやいや、このままずっとお待ちしよう」という恋情を詠う。四首目は、「秋の田」にかかる「霞」を「霧らふ」と詠うことから、季節感がはつきりしない、と評される歌であるが、「いつになったら我が恋心が止むのかしら」と、恋の苦しみを詠っている。

およそ、妻からこんな歌を贈られたら、顔は自然とやけてくるものであるが、これらの歌を詠ったとされる磐姫皇后は、古来もつと嫉妬深い皇后として知られる。『古事記』の所伝を示しておく。

其の^{大后石}石之日売命は、嫉妬すること甚多し。故、天皇の使へる妻は、宮の中を臨むこと得ず。言立

つれば、足もあがかに嫉妬しき。

磐姫皇后の嫉妬深さは格別で、天皇の中に近づくこともできず、「言(噂)」でも立とうものなら、足をバタバタさせて嫉妬したとある。さらに続く「古事記」の物語では、天皇に召された吉備の海部直の女、黒日売は皇后の嫉妬を恐れて本国の吉備へ逃げ帰ったとされる。しかも、皇后は、天皇が黒日売に贈った惜別の歌を聞いて大いに怒り、今まさに「難波津(難波の港)」から出航しようとしていた黒日売を船からおろし、陸路を徒歩で追い帰したという。

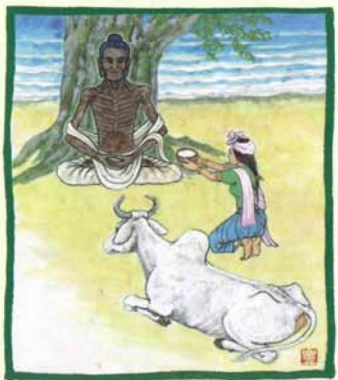
「万葉の時代」は「妻聞婚」(男性が女性のもとに通う)による一夫多妻制の時代だから、皇后を持つとはいえ、仁徳天皇も複数の妻を持つことができた。しかし、「あ、磐姫」である。「計を案じた天皇は、皇后が紀伊国へ御

綱柙を採りに出かけたその留守中に、異母妹の八田若郎女を宮中に召し入れた。八田若郎女を妻にするには、仁徳天皇に皇位を譲って亡くなった異母弟の遺言を守ったからだ。しかし、帰途の船中でこれを聞いた皇后は、恨み怒って採った御綱柙をすべて海中に投げ棄て、難波の宮には帰らず、そのまま筒木(京都府綴喜郡田辺町付近)の韓人奴理能美の家に入ってしまった。嫉妬に怒り狂う皇后の心を何とか和らげようと、天皇は舍人鳥山、ついで丸邇臣、口子と次々に使者を遣すが、皇后の心を動かすことはできなかったという。

恐るべし磐姫!だが、『万葉集』の歌だけを見ると至極「可愛い妻」なのである。文学表現のなせるわざとはいえず、なぜこのような歌が残されたのか。ヒントは八五番歌の「左注」(歌の左に付く注記)と、当該の作品群に続く異伝にある。



句・菅谷秀文 46



絵・橋本豊治

すスジャータの施しくれしミルク粥

釈尊は、六年あるいは七年にわたる難行苦行を捨てる。

苦行から得られるものは何もないと気付いた為、ナイランジャーナ河の水で沐浴し、心身を清めた。釈尊は一人の少女が供養した乳粥(パーサーヤ)をいただき、一樹の下で深い瞑想に入った。

(古代インドには、樹霊・樹神信仰があったといわれる。)